

設立60年 立体駐車場工業会発展に寄与 ダイコー独自の技術追究もさらに加速へ

森井清

『パーキングプレス』発行人
サイカパーキング株式会社代表取締役社長

兒玉康資

ダイコー株式会社代表取締役会長
公益社団法人立体駐車場工業会理事

【プロフィール】

兒玉 康資 (こだま やすつぐ)

1953年東京・日本橋生まれ 1976年明治大学政治経済学部経済学科卒業後、米国カリフォルニア・マックストン社入社 1977年ダイコー株式会社入社 1983年取締役統括室長、1993年常務取締役、1996年代表取締役専務、2001年代表取締役社長、2024年代表取締役会長就任、現在に至る。2011年から公益社団法人立体駐車場工業会理事も務めている。座右の銘：「夢なきところに理想なし 理想なきところに政策なし 政策なきところに実行なし」(味の素創業者 鈴木三郎助)

今号は2025年4月号。新年度に入るにあたって本誌は制作・発行体制を変更し、サイカパーキング株式会社 代表取締役社長 森井 清が発行人を務めることとなった。それに伴い、前発行人の森井 博、本誌編集長の山本 稔とつないできた特集対談・聞き手役のバトンも森井 清が受け継ぐ。これまで同様に、駐車場・駐輪場・シェアサイクルの普及や進化に寄与するさまざまなキーパーソンの貴重なお話をお楽しみいただきたい。

さて、新たな聞き手として最初にお迎えするゲストは、ダイコー株式会社の代表取締役会長・兒玉康資氏だ。ダイコーのみならず、2011年からは公益社団法人立体駐車場工業会(以下:工業会)の理事として、広くパーキング業界全体をけん引してきた人物だ。兒玉氏の話は、まず工業会にまつわる森井との共通体験から始まった。

対談収録: 2025年3月10日
聞き手: 本誌発行人 森井 清

立体駐車場工業会60周年 諸先輩の尽力に感謝の念

森井 兒玉さんには以前、前発行人の森井 博が本対談の聞き手を務めていた2020年4月号にご登場いただきました。本日は、当時からコロナ禍を経て5年が経過したこと、さらに工業会が今年11月8日に設立から60年を迎えるということで、改めて最新の状況をお聞きしたく、お時間を取っていただきました。私は本号が聞き手としての“デビュー”となります。よろしくお願いいたします。

兒玉 こちらこそよろしくお願いいたします。森井さんとは20年近く前でしょうか、工業会の南ヨーロッパ諸国の視察で一緒したのが初めてでしたね。スペイン、イタリア、ギリシャなどの駐車場事情を見て回りました。

森井 その節は本当にありがとうございました。以降、弊社グループ会社の日本駐車場救急サービス株式会社を通じた機械式駐車装置メンテナンスの技術的連携や、パーキング業界のさまざまな事象についてのアドバイスなどもいただいております。この場を借りて御礼を申し上げます。

兒玉 いえいえ、今後ともよろしくお願ひ致します。

森井 工業会60周年に関係するところでは言いますと、1962年2月の本誌創刊号(注:当時の誌名は『パーキングニュース』)で、立体駐車場工業会の発足に関するニュースが取り上げられていました。

兒玉 はい、それは存じています。60周年にあたって記念誌を発行しようと準備を進めており、これまでの工業会の歩みをまとめる作業を進めているのですが、ただ、時代によっては記録が不足している箇所もあるので、工業会発足前夜から黎明期にかけての事情に詳しい、森井 博氏に取材を申し込むつもりなんですよ。

森井 はい、その話は聞いております。どうぞよろしくお願いいたします。

兒玉 それにしても過去の工業会の活動記録をひもといて改めて実感するのは、工業会発足前後に尽力された諸先輩たちのバイタリティーの高さですね。弊社を含む機械式駐車装置メーカー数社が、工業会の前身となる業界団体をつくろうと奔走し、その会議の場に、数回複数の自動車メーカーにも参加いただいて意見交換を行った経緯が確認できます。今でも工業会と自動車メーカーとの情報共有、技術的な提携はありますが、1960年代半ばといえ、高度経済成長期の真っ只中で、国内の自動車産業が隆盛を誇っていた時期です。そんなときに時間を割いて同じテーブルに着いていただくように諸般を調整し、工業会設立に向けて意見交換をするというのは、簡単なことではなかったはずですよ。本当に頭の下がる思いです。

森井 先人達の尽力によって、現代の我々が仕事に邁進できる素地が築かれたわけですね。

兒玉 そのとおりだと思います。そして諸先輩たちは国土交通省との安全構築にも力を尽くされていました。現在、工業会には会員企業の若手に加えて国土交通省都市局街路交通課の担当者も参加する「企画委員会」があり、機械式駐車装置の安全施策などを議論しています。このようなスキームが今もしっかり機能しているのは諸先輩の努力の賜物であり、工業会の財産だと思っています。現在の工業会は、機械式駐車装置の使用中に何らかの問題が生じた場合、工業会事務局が国土交通省とのやり取りの窓口となり、事務局から会員企業にリアルタイムに情報が共有されるようになっていきます。これも工業会ならではのアドバンテージと言えますね。

森井 分かりました。工業会の60年の歴史が凝縮された記念誌の完成が本当に楽しみです。

兒玉 制作にあたっては先ほど申し上げた森井 博会長へのヒアリングを含めて、御社にお世話になる機会もあるかもしれません。ご協力をよろしくお願いいたします。

自動車メーカーと連携しながら EV充電インフラを整備

森井 今年1月の工業会の新年賀詞交歓会における中野会長のお話で、JIS改定に伴い、2023年に発行した「機械式駐車装置の安全機能に関する認証基準第3版」に基づく認証審査を開始されたとお聞きしました。この活動の意義や進捗状況、展望を教えてください。

兒玉 それについては、まずこれまでに起きてしまった事故の振り返りからお話します。工業会は「一に安全、二に安全、三に安全…」と、機械式駐車装置の安全確保を第一の命題として活動し



て参りましたが、それでも過去に不幸な事故はいくつか発生してしまいました。事故は3種類に分けられます。第一はお子様に関連するご利用者様の不適切な使用による事故、第二が災害による事故です。災害関連では昨年1月の能登半島地震でも車両落下の事例がありました。ただ、あのケースは使われていた機械式駐車装置が老朽化して新基準に適合しておらず、更新時期に当たっていたという事情もあったのですが……。駐車場

リニューアル、新品への入れ替えはお客様の資金にもよるので、スムーズに進められないジレンマもあるのですが、ともあれ粘り強く交渉していくしかないと考えています。

森井 能登のケースはそうした事情もあったのですね。

兒玉 はい。そして第三がメンテナンス時に発生する保全担当者の労働災害です。3年ほど前にはメンテナンス中に消防設備を動かしたことが要因となった事故もあり、その際には消防庁とも打ち合わせて再発防止策を講じました。ともあれ「機械式駐車装置の安全機能に関する認証基準 第3版」に基づく認証審査は、今申し上げた3点に留意をしつつ、国土交通省とも連携しながら進めるべき事案です。今年5月の工業会の総会にかけ、さらに進展していけばと思います。

森井 「安全」を最優先課題にしていく姿勢は不変であると。

兒玉 もちろんです。工業会では設立20年目くらいから、国土交通省に対して、機械式駐車装置にもエレベーター同様の定期的な検査制度を義務付けては

どうかという提案をしていた経緯がありましたが、残念ながら実現には至りませんでした。そこで、これは完全に私見なのですが、検査制度の代替案として「自主検査」はどうか考えているんです。工業会会員のメンテナンス会社が1か月に1回といったペースで定期的な点検を行うことで、

安全性の維持を図ることができます。

森井 それはぜひ実現を願いたいものです。続いて今後に向けた中長期的な見通しについてです。まず、機械式駐車装置における電気自動車(EV)の充電対応について、工業会としての取り組みはいかがでしょうか。

兒玉 先述した工業会の企画委員会が自動車メーカーと意見交換をさせていただいています。日本のEVシフトは他の先進国に比べれば遅れてはいますが、ガソリン車からEVへ移行する過渡期に入っていることは間違いありません。駐車場で充電インフラが整備されればEVの普及にもつながることから、協力的に応じていただく自動車メーカーは多い印象です。

森井 自動車メーカーのEVシフトへ向けた意識の強さが感じられますね。

兒玉 現在のイメージでは、機械式駐車装置での充電は、物理的なプラグインではなく、非接触充電が理想的なようです。プラグイン式ですと車室が狭くなるなどのデメリットがありますが、スマホなどで一般化しつつある非接触なら、スペースを割くことなく充電インフラを導入することができます。

森井 なるほど。

兒玉 そして、もうひとつ将来的に機械式駐車装置に搭載を願いたいのが「自己診断機能」ですね。例えば、ある部品が完全に要交換の状態であるとか、この部分が少し傷み始めているなどの情報をIoT技術の活用によって知らせてくれる機能です。保全担当者は現場に行く前にダメージの状況を把握できるので、ピンポイントで部品交換や修理ができ、時間・コスト両方でお客様の手間や出費をセーブすることができます。ファクトリー・オートメーションなどをはじめ、さまざまなものづくり業界で導入が進んでいますが、ぜひ我々もそのメリットを活用したい。工業会としても導入に向けて動いていければと思っています。

工業会が2025年1月に発行した注意喚起チラシ。子どもが関係した事故事例の分析に基づき、

- ①ゲートの出入口に近づかせない
 - ②運転操作盤に触れさせない
 - ③子どものみで駐車装置内部に入らせない
 - ④子どもを車内に置き去りにしない
- 以上4点を強調した内容となっている。

機械式駐車場の所有者・管理者・操作されるみなさまへ
機械式駐車装置を安全にご利用いただくために
お子さまの保護者の方々に
必ず守っていただきたいこと

機械式駐車場でお子さまが関係した事故事例をまとめ、お子さまの保護者の方々に必ず守っていただきたいことをご案内いたします。

- 1 ゲート等の出入口に近づかせないでください**
 お子さまが駐車装置の稼働の音に気づき、好奇心からゲートに近づくと、閉まったゲートに巻き込まれる事故が発生します。
- 2 運転操作盤に触れさせないでください**
 お子さまによる誤った操作により駐車装置が暴走し、巻き込まれた人がピンポイントへ転落し、重傷や死亡事故が発生することがあります。
- 3 お子さまだけで駐車装置の内部に入らせないでください**
 お子さまだけで駐車装置の内部に入った場合、巻き込まれる事故や、駐車装置の開口部から転落する事故が発生することがあります。
- 4 お子さまを車内に置き去りにしないでください**
 置かれたお子さまを尋ねに来た乗客や駐車装置の運転操作盤のため、目撃したお子さまが重傷や死亡事故が発生することがあります。

ここに示した事故事例はほんの一部です。いずれの事故も普段から危険に対する認識を持っていれば防げた事故です。お子さまからは絶対に目を離さず、予期せぬ行動にも注意してしっかりと見守ってください。ここに紹介した事故事例の内容をご理解いただき、お子さまの備わった事故を防止するためにご活用いただけますよう、よろしくお願いたします。

公益社団法人 立体駐車場工業会
 〒104-0033 東京都中央区新川二丁目9番9号SHビル6階
 TEL (03) 5542-0733 FAX (03) 5542-0735
 ホームページ <https://www.ritchu.or.jp/>
 E-mail ritchu@ritchu.or.jp

超大型“長手”エレベーターで エンタメ領域のニーズを開拓

森井 では、ここからはダイコー株式会社・代表取締役会長としての兒玉さんにお話を伺って参ります。ダイコーさんと言えば、特に油圧式装置において業界のパイオニアであること、ターンテーブルやカーリフトの技術を活かした獨創性、一品一様、オーダーメイドの製品群などを連想します。近年の御社のトピックスを教えてくださいませんか。

兒玉 まずは、前回の対談でも触れさせていただいた渋谷ヒカリエに納入した積載量10tの超大型エレベーターを挙げたいと思います。ヒカリエは2012年竣工で少し前のプロジェクトにはなるのですが、弊社のエレベーターは建築設計業界で高く評価をしていただきました。その後、他案件への納入実績が増えていった点で、弊社にとって画期的な事例になったのです。

森井 改めて特徴を教えてください。

兒玉 このエレベーターは、ヒカリエの11～16階に位置する劇場・東急シアターオーブで使われる舞台装置や照明などを搬入・搬出することに特化したエレベーターです。地上1階と劇場の搬入・搬口がある13階とを結んでおり、行程は約60mです。荷物搬入路の間口は約8mの長手で、出入口手前に搬入物の向きを変える大型ターンテーブルも設置しています。

森井 ヒカリエは高層階に劇場があるという珍しい施設なんですよ。

兒玉 はい。その後、東京をはじめ多くの都市で高層複合タワーが開発され、その中高層階に導入された劇場への搬入搬出用エレベーターとして引き合いが増え、納入実績を伸ばしました。例えば2018年に竣工した、さっぽろ創生スクエアの4～9階に入っている多層構造の劇場「札幌文化芸術劇場 hitaru」用に開発したエレベーターもおかげさまで高

く評価されています。ほかにも、現在まだ開発中で詳しくは申し上げられないのですが、東京駅至近で続々と進んでいる大規模再開発においても、高層タワー内の劇場用エレベーターの案件が進んでいます。

森井 エンターテインメントの領域に特化した超大型エレベーターというのはダイコーさんの技術あればこそですね。

兒玉 ありがとうございます。もうひとつ、別の比較的レアな納入先としては日本国内の防衛関連施設があります。

森井 それはまたユニークですね。どのような製品ですか。

兒玉 小さなものは防衛省関連の住居用のエレベーターから、大きなものになると、基地内の倉庫で使う積載量25tほどの機材を載せるエレベーターなどを設計しています。場所は多岐にわたり、横田、厚木、横須賀、岩国、佐世保、沖縄



県内の各基地などです。弊社は日本国内の防衛施設標準に即した製品開発の知見を持っていますが、米軍施設内は治外法権であり、独自の基準があるため、そちらにも対応しなければなりません。また、何らかの不具合が生じた際に



① 2018年に竣工した、さっぽろ創生スクエアの4～9階に入っている「札幌文化芸術劇場 hitaru」用に開発したエレベーター。② このエレベーターをモチーフにしてダイコーが制作したプロモーション。ダイコー社員の名刺の裏にも載っている。

は、当然素早いレスポンスが求められるため、国内各地の営業所では常時体制を整えているんです。

森井 日米比較でどちらのほうが技術的に難しい、といった差のようなものはあるのでしょうか。

児玉 極端な差はないのですが、考え方の違いから求められる性能が異なることはありますね。例えば火災対策です。日本には、火災時に発生する煙を広げないよう、早い段階で煙を検知し、できるだけ当該エリア内で閉じ込めるためにシャッターを閉めて煙を出さないようにするという認定基準があります。片や米軍施設は煙もさることながら耐火性を重視する傾向が強いですね。煙が出てしまうことよりも、例えば1時間半の間、焼け落ちない耐火性能を備えたエレベーターのシャッターが求められます。

森井 日本とアメリカ、両方の基準に対応できるというのは、1958年の創業以来培ってこられた御社の技術力の賜物です。これからも、その知見を工業会やパーキング業界にできる範囲でフィー

ドバックしていただければと思います。

児玉 分かりました。

駆動技術を活用して JAXAの宇宙科学研究を支援

森井 建築物の中高層階に設けられた劇場用、米軍施設など納入先の多彩なバリエーションに、改めて御社の開発力の高さを知ることとなりました。ほかにもオリジナリティのある実績はありますか。

児玉 ターンテーブルの技術を活かしたものでは、青森県五所川原市の「立佞武多(たちねぶた)の館」に納入した25t積載可能なターンテーブルがあります。

森井 立佞武多というと……。

児玉 五所川原の立佞武多は、高さ約23m、重さ約19tもある巨大なもので、弘前市の扇ねぶたや、青森市の人形ねぶたとも違う様式の人形灯籠です。これを常設展示しているのが「立佞武多の館」(注：2025年4月1日から2026年6月末日まで休館予定)で、ターンテーブルは

毎年8月の祭りの際、人形灯籠をまちに出し、格納する際に使われるものです。

森井 (本ページ下の写真を見て)おお、これは迫力がありますね。19tもの重さを支えるというのは、やはりさすがダイコーさんのターンテーブルだなと思います。

児玉 また、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)による最先端の宇宙科学研究用の大型気球を打ち上げる放球装置も開発しました。ロケットの打ち上げと言えば種子島が有名ですが、この装置を納入した場所は北海道の大樹町(たいきちょう)。帯広の南約60km、太平洋に面した町です。ここにはJAXAをはじめ、民間のベンチャーや大学などが航空宇宙関連の多様な実証実験、打ち上げ試験を行う「北海道スペースポート(HOSPO)」という広大な施設があるんですね。実業家の堀江貴文氏が参画する宇宙ロケットベンチャーが使用していることでも知られています。**森井** なるほど。“宇宙科学研究用の大型気球を打ち上げる放球装置”というの



①② 青森県五所川原市の「ターンテーブル」。高さ約23m、約19tの巨大な人形灯籠を回す。③～⑥ JAXAに納入した放球装置で大型気球が打ち上げられる様子。放球装置を構成する2機の台車は、最大2tの観測装置を保持でき、長さ460mのレール上を独立または同期して走行が可能。使用する気球の大きさや風向に合わせて装置の微調整も可能な世界で唯一の装置。©JAXA



はどのようなものですか。

兒玉 風向きに合わせて気球を回転させ、アームで気球をリリースする巨大な装置です。エレベーター、エスカレーターの駆動技術に応用したターンテーブルや観測機を積載した親台車と、跳ね上げ装置で大型気球を跳ね上げる子台車の2台で構成されています。以前、JAXA向けに巨大なターンテーブルを納入した実績が評価され、依頼を受けて実現したものです。これまでに1号機、2号機と2台納入しています。

森井 とてもロマンを感じさせるプロジェクトですね。

兒玉 ありがとうございます。この大型気球は上空50～60kmを飛行しますので、天気が良ければ肉眼でも見えるんですよ。年に2回ペースで大樹町から打ち上げられると聞いております。よろしければ次回ご案内いたしますよ。

森井 ありがとうございます！

兒玉 最後に駐車場の「マンションカーリフト」を紹介させてください。これはマンションに導入されている完全ブラ



対談は、これまでに開発した装置の模型などが展示されている新社屋1階のミーティングスペースで行った。開発実績は多岐にわたり、大変興味をそられるものばかりだった。

イベートの専用エレベーターで、自宅があるフロアまでエレベーターで車を上げ、自宅に設けたガレージに駐車するための装置です。オーナーは自宅からガラス越しに愛車を愛でることができ、セキュリティ、プライバシー保護も万全です。最初にニューヨーク、続いてベルリンのハイクラスタワーマンションに登場し、弊社が札幌のマンションに導入したのが世界で三番目の事例になりました。ありがたいことに高い評価をいただきまして、大阪・

梅田でも既に納入実績があるほか、現在、ほかの物件からも問い合わせをいただいております。どうですか、森井さんも弊社のカーリフトが導入されたマンションのご購入を検討されては。

森井 視察はぜひさせていただきたいのですが、そんな高級マンションの購入は(笑)。本日は立体駐車場工業会理事としての展望からダイコーさんの取り組みまで幅広くお話をいただき、学びの多い対談となりました。ありがとうございました。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

PP



①② 2022年、札幌で日本初導入されたマンションカーリフト。出入口やカゴ内のライティングなどのデザインには多様なオプションも付いている。

聞き手：本誌発行人 森井 清（もりい きよし）

1993年東海大学大学院体育学研究科修了後、外資系保険会社を経て2002年に日本駐車場救急サービス株式会社入社。2005年同社代表取締役社長就任。2014年モリスコーポレーション株式会社代表取締役社長就任。2008年サイカバーキング株式会社監査役就任。2016年同社代表取締役社長就任。

過去の対談記事をWEBで公開しています

パーキングプレス 対談 で検索

または <http://www.parkingpress.jp/taidan/> にアクセス

